自宅学習期間の九月六日（月）、月曜朝礼の講話をオンラインで各ご家庭に配信しました。子ども・保護者の皆様がそれぞれのお宅で、どんな様子で聴いてくださっているのか想像しながら話をさせていただきました。

夏休み中、各地で花火大会が行われ、夜空に咲く「花」を見上げて歓声が響く。少し前までは日常、こんな光景が夏の風物詩でした。このコロナ禍の中、人が集まらないようにと、各地の花火大会は中止。毎年七月末に行われている隅田川の花火大会も中止となりました。

花火大会の時に「玉屋～。」と叫んでいる人を見たことはありませんか。この玉屋さん、江戸時代の花火屋さんです。もう一つ、鍵屋さんという花火屋さんもありました。

歴史は鍵屋さんの方が古く、鍵屋の番頭さんだった人が新しく作ったのが玉屋さんです。この当時、隅田川は「大川」と呼ばれていて、上流で玉屋さんが、下流で鍵屋さんが花火を上げ、それを応援するためのかけ声が「たまや～。」「かぎや～。」だったのです。

玉屋さんの花火の方に人気があったのでしょうか、こんな狂歌が残っています。

「橋の上　玉屋玉屋の声ばかり　なぜに鍵屋と　いわぬ情なし」

鍵屋さんの立場からすると、玉屋さんを応援する人を、情なし（冷たい人）と感じるのも無理のないことですね。

この狂歌、とてもよくできていて、鍵屋さんの気持ちを表しているように見えて、「情なし」を「錠なし」と掛けて、錠がないから鍵は開けられない。だから口を開けて、鍵屋とは言えないというしゃれも込められています。実は玉屋さんは火事を起こして、残念ながら花火屋さんをやめざるを得なくなってしまいました。その玉屋さんを惜しんでの「たまや～。」だったのかもしれません。ちなみに、鍵屋さんは今でも残っています。

ところで、そもそもなぜ、隅田川の花火を上げるようになったのでしょう。

江戸時代に起こった飢饉（ききん＝火山の噴火やイナゴやバッタやウンカのせいで、お米や農作物が取れなくなり、たくさんの人が飢え死にすること。）や疫病（えきびょう＝現代風に言うと伝染病。死に至る怖い病気。）という、嫌なこと・辛いことが退散してくれるようにという願いを込めて、さらに、亡くなった方の魂の平安を祈るために花火を打ち上げるようになったようです。

コロナ退散の願いを込めて、花火を上げることもできず。「アマビエ」に頼ってもうまくいかず。では、ぼくたちはどうするのか。

「リーバー」（※健康観察アプリ）です！家族全員毎日の健康観察を続け、必ずリーバーで送信してください。いつ誰がコロナにかかってもおかしくない状況です。かかるのは仕方ないとしても、広めないように注意をすることはできます。家族で体調の悪い人がいる場合は、君たちがピンピンしていても、グッと我慢して学校に来ないようにしてください。文部科学省からも強いお願いが来ています。

それから手洗い・マスクです。マスクの性能は不織布が一番。次は布製。三番目はウレタン製だそうです。顔に密着させること。このことを皆さんにお知らせしてくださいと、文部科学省から手紙が来ていました。人ごみに出るときなどは、性能のいいマスクに変えるような工夫が必要かもしれませんね。

それから換気。今みんな家にいるでしょうけれど、エアコンをつけていても換気は必要です。窓を開けること。もっと効果的なのは、扇風機を使って、室内の空気を開いた窓から外へ出すようにするといいそうです。

コロナ退散は、花火やアマビエに頼るのではなくて、君たち自身にかかっています。リーバーの入力の有無をアマヒデこと、天野英彦教頭先生が毎日チェックをして、入力の無いご家庭のことが心配で、心配でたまらないと、顔をしかめています。教頭先生の顔にしわを増やさないようにしてくださいね。

（立教小学校校長　田代　正行）